

綜合討論

卵の利用

南直人(歴史学) 家畜化の大きなメルクマールに生殖管理があるとすると、時期はかなり新しいにして卵の問題は大きいと思います。牛や山羊における乳利用の問題のアナロジーでみることはできないでしょうか。つまり、肉にするには生き物の命を絶ちますが、卵の場合は生かしたままなので。

秋篠宮文仁(生き物文化誌) まず家畜化初期の鶏では卵利用は難しい気がします。年間一〇個ほどしか産まないですから。ただ、毎日卵を産む鶏の記載がエジプトにありました。また一九世紀の記録に「毎日産卵するオランダ鶏」という鶏があります。その段階になると卵の利用も視野に入れる必要があるでしょうし占いにも使えます。たしかに乳の利用と一つのアナロジーで考えられると思います。真柳誠(中国科学史) たとえ産むのが年に一〇個でも、鶏の卵は鳥のなかでは大きいほうだし、似た大きさのアヒルの卵よりずっとおいしいです。たとえば紀元前二世紀に埋葬された中国の馬王堆の遺跡では、明らかに鶏の卵の殻がたくさん出てきたので一緒に埋葬したのがわかります。やはり価値があり重視された可能性はないでしょうか。

秋篠宮 そのあたりよくわかりませんが、まず森で卵を捜すのが非常に大変でしょうね。

佐伯順子(文学) 卵のお話で。鶉は卵も肉も一般的に料理に使うと思うのですが、鶉の家畜化の過程は、鶏の家畜化プロセスと類似のものなのでしょうか。

秋篠宮 鶉というのは、日本で家畜化された非常に稀なケースだと思います。テイミング(馴化)という意味では、割とどれも近いと思います。では、鶉自体が野生のもの比べてどれくらい変化した

（中略）

儀礼食とは何か、考えていることはありますか。

高田 儀礼食はなかなか。今はスーパーで肉を買ってきてシマカンカー（悪疫払い）をやっちゃうんですね。ただ、沖縄市に「こどもの国」があるので、昔ながらの在来の稲の藁を持って行って子どもたちと一緒に注連縄しめなわ作りのワークショップをし、肉を持って行って集落行事の復活的なことをします。シマカンカーも白豚でなく本来の豚で全部やろうと。与儀という集落にシマカンカーというフーチゲーシ（邪気返し）が集落行事として残っているので、それを何とかつなごうとやっています。

藤本憲一（情報美学） 野生種ではなく、グローバル化以前の在来種を保全する生物的・文化的意義について説得力をもつてうかがったところで、在来種のアイデンティティや正統性について確認を。

高田 「豚」はキーです。沖縄の若い人でも三〇代から上ぐらいなら、豚の話をするらずスイッチが入る。豚のことなら誰でもしゃべる。「豚のスイッチ」っていうんですけれど（笑い）。飼ったこともないのに豚に関しては知っている。そういうアイデンティティ、沖縄の人と豚とはならないけれど、生活の非常に近いところで、どういう豚でどんな扱い方をしたか、生活体験でみんな認識している。そのことを大切にしたいよね、そういう社会も大切にしたいほうがいいよねって、いうことで。

藤本 観光人類学者的なふりをして質問したんですが、観光戦略としてもロマンチックですごくいいなあ。とくに若い人でも豚でスイッチが入るといふあたり沖縄らしくてとても面白い。

江頭宏昌（農学） 私も在来作物（植物）の保全を研究しているので、経済性の低いものをどう守るかという大きな課題はまったく同じで、多様な価値観で守るべきという主張はとても共感しました。在来の家畜の文化的意義の一つにアイデンティティを象徴するとありましたが、具体例を紹介してくだ

戦略

会を形成していくプロセスとは表裏一体なのかどうか、という問題です。多少の時間差はあるにしても、二つの過程は互いにトレードオフして作り上げたものなのか。あるいはまったく別な次元で動いている、二つの異なる現象なのか。この点が次なる疑問として浮かびあがってくるのではないかと思います。

馬場 今の話とも絡みますが、自己家畜化という言葉で私がふと思い出したのはアメリカの肥満です。貧しい人のほうが太っている。高カロリーを効率良くぶちこむとどうなるか、たぶんブロイラーにやっっていることと同じで、人間のブロイラー化みたいなことだと思っんです。そうすると、先ほどのオキアミを全員に食べさせようなどは、典型的な家畜化的発想じゃないかと。じつは家畜化において、人間の家畜化を改めて考えると、どういう動物や自然資源などのかかわり方を人類はそれぞれの社会で選択してきたか、かなり先鋭に現れるのではないか。それが今後、自分たちの家畜化のバランスも含め、私たちがどう家畜とのつきあいをするか考える課題につながるという印象をもちました。

藤本 歩み寄りの話を、遣伝子レベルからソシオバイオロジー的にみると、ブロイラーの形であろうが、野鶏と同じ遣伝子は、ものすごく大繁栄をしていると。家畜化という戦略をとることで、狼は滅びかけたけれど犬ははびこっている。遣伝子を後世に保全するために、野生という戦略と、家畜化Ⅱ人間になつく戦略の、二つをとって生き残る両面作戦に、生存戦略が分かれたんですね。

では家畜化とは何か。人間そのものが自己家畜化（自立した野生を自ら飼い慣らす）したネオテニー（幼形成熟）動物であり、いわば、家畜化とは可愛くなる戦略だと。人間は大人でも、猿に比べれば

可愛い（笑い）。赤ちゃんほいし、無毛で丸まっつい。家畜も、猪から豚、狼から犬というふうになんか可愛くなった。いや、実はそうではなくて、丸く無毛になった幼い形態を可愛いと呼ぶ感性や美学を、僕らはひよっとしたら、「自己家畜化」戦略を選んだ時点で、インプットされてきたのではないか。

小林 私は経営が専門ですが、近代になって家畜化は、自然の影響を受けるカルチャー（第一次産業）から、プロイラー飼育や陸上での海水魚の完全養殖のように、自然との関係を遮断し意のままに生物をコントロールするファクトリー（第二次産業）へと大きく移行しているように思います。しかし、このような大がかりな装置は、二一世紀の多様性を求める分散型社会には適さず、小集団を単位とする在来家畜や放牧が、新たな家畜のあり方として再び見直されるのではないかと思います。

江頭 クロマグロが一つの例ですが、おいしいからと世界的に需要が高まり取り合いになっていくと、やはりその種が絶滅の危機にさしかかる時代がいつかは来るだろう。その時、完全養殖の技術が確立していれば、いつかまたその種を自然に戻したりして守れるかもしれない。そういう可能性も含めて、種を守るという意味で大きな意義が養殖にはあると、家畜化のなかにはあるのではないかと思います。これは来年の作物の話でも、同じことが言えるかもしれません。

池谷 野生から家畜へ、その未来を考えると、松井さんが話さなさいわゆる歴史的なドメスティケーションが、やはり未来につながる可能性においても重要な論点だったと思います。松井さんが提示された「もしかしたら遊びだったかも、娯楽だったかも、儀礼だったかもしれない」、その多様な「人間—家畜関係」が、むしろ今は崩壊して一本化していることに対する危機感と、二一世紀に対する新たな像を構築しなければならない。

食の文化フォーラム 33

野生から家畜へ

2015年9月30日 第1刷発行

定価 本体 2500円＋税

編者 松井 章

企画 公益財団法人 味の素食の文化センター

発行者 佐久間光恵

発行所 株式会社 ドメス出版

東京都文京区白山 3-2-4 〒112-0001

振替 00180-2-48766

電話 03-3811-5615

FAX 03-3811-5635

<http://www.domesu.co.jp/>

印刷所 株式会社 教文堂

製本所 株式会社 明光社

乱丁・落丁の場合はおとりかえいたします

© 2015 秋篠宮文仁, 池谷和信, 石井智美, 小宮輝之,
高田勝, 馬場基, 原田信男, 松井章, 宮下盛, 米田穰
(公財)味の素食の文化センター

ISBN 978-4-8107-0819-6 C0036